

オリンピック狂騒曲

リオ・デ・ジャネイロオリンピックは、ある意味面白かった。

水泳はいきなり金メダルと銅メダルを獲得するし、途中で金藤さんの金メダル、さらにリレーで世界水準に達していることがわかった。

体操は、予想通りというか、希望通りの団体・個人の金メダルで、相変わらず日本の強さ、美しさを証明した。

存続が危ぶまれたレスリングは、危うい逆転勝利が多かったが、金メダルをいくつかつたために往年の盛名を取り戻しつつある。

柔道については、金メダルはすくなかったが、ほとんどの選手が銅メダルを獲得したため、前回のような屈辱はなかったように表現しているだけである。

まあ大体このくらいがメダルの候補であり、日本の限界でもある。

筆者言う、なぜ金メダルにこだわるか？ そのために税金を費やし、選手強化してきたのではないか。ましてや、参加するからには勝たねばならない。クーベルタンの言う「参加することに意義がある」などを信じている者はいないだろう。

一般論で、体力、筋力を使う競技では日本人の活躍は期待できない。球技でも、ラケットを使うものはいいが、ただ走ったり蹴ったりの競技には弱いという印象があるが、7人制ラグビーでニュージーランドに勝ったことは、この世界ではとびっきりの快挙である。なにせ相手はオールブラックスやさかいネ。

そんな競技も、そういえばあったなあというのがカヌーである。これも快挙といってもいいだろう。あと、重量挙げの三宅さん、競歩の荒井さん。前回話題になったボクシングやフェンシングは鳴かず飛ばずでした。

テニスの錦織、バドミントンの高松ペア、卓球の水谷や団体、女子団体のメダル。とくにバドミントンの優勝は、協会のノー天気な役員どもに、博奕なんかしなくても勝てることを実証した。バドミントン協会は、東京大会での桃田の復活に期待をもっているようであるが、絶対に復帰させてはダメです。理由は後述します。いかに、すでに社会的制裁をうけた、と言ってもダメです。

ひどかったのが陸上競技である。あれだけ大騒ぎしてマラソンの選考をした挙句、「スタートダッシュで出遅れて、どこまで行っても離される、・・・」の歌の文句そのもので、はじめから先頭グループにいないのやから、勝つつもりがない、と言われても仕方がない。その他の走力、投擲、跳躍、どの種類においても惨敗だった。最後の400メートルリレーの2着を表面にだそうとしているが、競技全体が、参加に重きを置いているのがバレバレである。

リレーの選手たちに、ボルトが握手を求めてきたのは、かれらにとってはこの上もない喜びだっただろう。野球でいえば、全盛期の長嶋茂雄に握手してもらったようなものだから。衣笠祥雄は、当時キャッチャーだった。初めて長嶋と対戦した時、マスクから覗きあげて「これが長嶋か」としばし野球を忘れていたという。

東京大会で、今回のような成績が得られるとは考えにくいのであるが、それは、今回ほとんど僥倖に恵まれたとしか言いようのない競技がいくつかあるからである。だからといって今回のメダリストを否定する気は毛頭ないのだが。むしろ、今までいわゆるプレッシャーに負けた、という面もあるから。そのため世界の大会に参加させて場慣れするべきだと思っている。今回4位だったから次回はメダルと大騒ぎするのが新聞である。何の根拠もない。

今回ぶっつけ本番みたいな選手もいるだろうが、何回も出場しながら不甲斐ない成績しか残せなかったのが大勢いる。誰とはいいませんが。オリンピックに限らず、世界大会で、せめて自己記録なり日本記録を更新したならまだ許せる。それよりはるかに劣る成績で、よくまあ恥ずかしげな顔もせずに帰ってくるなあ、という選手のいかに多いことか。

マスメディアも悪い、というより、彼らが元凶である。たとえば桐生が10秒01をだしたら、次に走れば夢の9秒台に到達する、などとはしゃぐ幼稚な頭脳の記者ばかりである。(新聞記者は頭が悪いは、すでにどこかで書いた)

かつて日本記録は10秒3(手動)であった。「暁の超特急」と呼ばれた吉岡隆徳の記録である。その弟子の飯島に10秒1がでて記録は破られたが、南部忠平さんが語ったことがある。(南部忠平は、走り幅跳びで当時の世界新記録である7m98cmを記録した。)当時の一流の選手の集まる100m競争で、吉岡君らと勝ったり負けたりしたものですよ。記録とはそういうものだから、桐生がどうの山縣がどうのという話ではないのである。天の時、地の利、人の和があって初めて成

し遂げられる偉業なのである。今回でも自己記録を破ったのは山縣だけではないか。期待をもつのはいいが、すぐにでも到達できるような、やわな記録ではないのである。桐生など、自分の前に人がいなければいいのだが、前に人の姿が見えると明らかに上体に力みがでて、急激にスピードが落ちる。そういう、単純に走るスピードを競うものではなく、心理的にも負担の大きい競技なのである。

あとレフェリーのレベルの問題もある。柔道もビデオを導入しているが、まだレスリングのほうが納得できることが多い。6年間負けたことのないフランスの選手だったか、100 kg 超級に出場していた。たしかに均整の取れた体格で強いのは間違いない。しかし、レフェリーが「勝たそう」としていることが露骨に見えて不愉快になった。またフランスか。日本の原谷の組み手を嫌って組もうとしないなら警告だろう、少なくとも2回や3回はあったから、日本選手の勝利である。さすがに恥ずかしかったか、あとで言い訳のように記者会見をしていたが、噴飯ものである。木村政彦や山下泰裕たちとはわけが違う。

オリンピックの陰で、僕にとってはもっと大きなニュースが霞んでしまった。ひとつは、イチローの3000本安打である。才能に加え、黙々と努力をする（これに耐えられることも才能のなせる業かもしれないが）ことによって達成したもので、他の大リーガーたちと異なるのは、日本で9年、1000本以上の安打を打ったあとでの、挑戦である。10年連続200本安打、シーズン大リーグ記録の書き換えなど、ヤンキーどもの度肝を抜く快挙の連続であった。そして他人には見せない涙を流した。「100年にひとり」というが、「何百年にひとり」かもしれないし、あるいは古今を通じての天才かもしれない。

もうひとつは、豊田泰光の訃報である。若い人はもう知らないだろうが、水戸商を卒業し、三原脩率いる西鉄ライオンズに入団した。三原は、守備には目をつぶって、いきなりショートのレギュラーで起用した。そしていきなりシーズン27ホームランを打った。これは、高校生出身では清原がでるまで破られることがなかったし、現在でも高校生出身で20本以上打つ選手はでない。このころの西鉄は、黄金時代であり、大下、中西、仰木、日比野など錚々たるメンバーで、そして豊田は野武士と呼ばれた。中西太の日本初の三冠王を阻んだのも豊田である。

のち国鉄スワローズに移籍した。当時の国鉄は、400勝投手の金田が好き放題

をしていたが、当然豊田とは衝突する。それも、かなり早かった。

豊田のプレーで今でも覚えているのがある。これぞプロというもので、ふつう、ランナーが二塁に向かって走っているとき、送球がきそうなとき野手は身構えて待っている。すると、ランナーは懸命に走る。ところが、豊田は、グラブを下におろし、送球など来ないようにふるまって、ボンヤリと塁上に立っている。当然ランナーは、まだボールが来ないと思い、ゆっくりと走る。すると、2 塁直前になって送球がきてタッチアウト。巨人の森が不思議そうに、振り返り振り返り引き上げていく。いわゆる職人芸である。

ある時、2 塁上でのクロス・プレーで長嶋が懸命に審判に抗議をしていると、しばらくして豊田が、いわば自分も関与しているプレーなのに「まあまあ」とかなんとか、長嶋をなだめてアナウンサーもびっくりしていたこともある。

豊田はまた、身寄りのない男の子を家に引き取って一緒に生活をしていた。「用心が悪いから」などと照れて言っていたが、いま、そのようなことをしている選手がいるだろうか。…豊田は、絵に描いたような野武士であり、快男児だった。

この西鉄に甲子園で鳴らした池永正明が入団した。1 年目から 20 勝のエースである。5 年後この池永に八百長の誘いが先輩からきた。当然断るが、相手が先輩だからそれほど強く拒否するわけにもいかない。とりあえず自宅まで持参した 100 万円（今なら 1000 万円くらいか）を置いて帰ったが、使う気もないし、八百長をする気もない。押し入れに入れたままであった。ところが、その筋の人間と付き合いのあった永易将之が、金欲しさにあることないことをデッチ上げ、池永も八百長をしたことにされた。この件が表沙汰になり、なぜかプロ野球機構は、いつもちゃらんぼらんのくせにこのときだけ毅然として、池永まで有罪として永久追放にしてしまった。池永の言い分など耳を貸さない。（機構に報告しなかったなど妙な理屈で突っぱねた。そういうのをチクるといってまともな人間がすることではないのである。）その後、幾度か池永は八百長をしていなかったとして復帰させてもいいのではないかと、という動きがあったが、まだ活躍できる時代には認められなかった。われわれは、「これはかわいそうではないか」と思うが、プロ野球機構の建前が優先されて、選手としての復帰は叶わなかった。当時の他チームの選手からは、「八百長をしているのでは・・・」というボールを投げられた記憶はない、という。・・・巨人の桑田にも反社会勢力との交際疑惑が騒がれ、当番日漏洩の噂がでたこともあったが、巨人軍の威光で、おとがめなしであった。最

近、巨人の選手が何人か処罰されたが、いわば選手としては並以下だったためであろう。

西鉄の八百長については、監督の稲尾以外は全員が知っていたらしい、という話が流れた。

で、初めのバドミントンの桃田に話が戻る。かれはあきらかに嘘をついている。50万円くらい負けた、というが、その程度で許してもらえないわけがない。一度だけ先輩に連れられて行ったがその後は足を向けていない選手もいるのだから、そういうことなら許せる可能性もあるが、みずから、反社会勢力のもとに何回か出かけているのだから、確信犯である。バドミントン協会も「すでに社会的制裁を受けている」などとノー天気なことをいうのは、メダルが欲しいからだろう。それよりも自らの姿勢を正すべきで、それこそ毅然とした姿勢で臨むべきだ。……個人的な恨みはないが、清原のような例もある。名をこそ惜しめ！　ただ、バドミントンの技術と人格とは別である（これは単に強豪を選手団に残したいだけの牽強附会）、というなら、リオに参加させてもよかったじゃないか。ただし、そこまで強くなったのは、税金を使っての強化費のお蔭というもので、これの返還を要求すべきだろう。

2016.08.29.